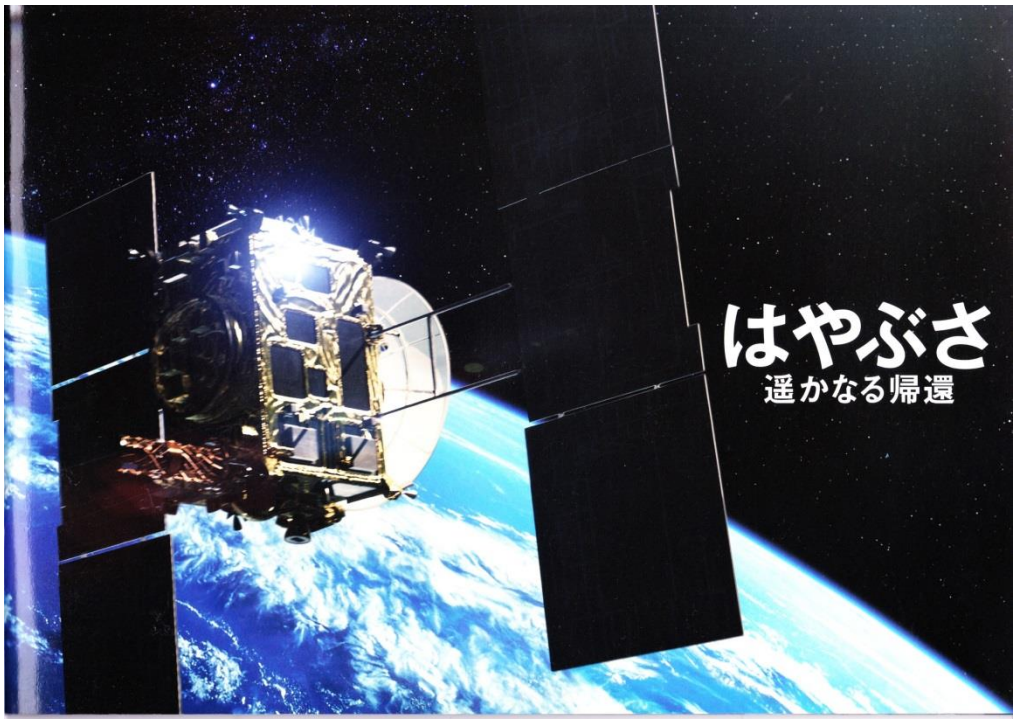
# はやぶさ

2012.02
久家　隆男




昨日久しぶりに映画を観てきました。「はやぶさ　遥かなる生還」です。

はやぶさのミッションが中心でホームドラマ的な要素は少ないストーリーで、プロジェクトＸの様な感じです。多数の俳優がＪＡＸＡ（宇宙航空研究開発機構）やＮＥＣの技術者を演じており、物事に一途に取り組む技術者特有の感じが出ていました。

はやぶさの度重なるアクシデントの解決のために昼夜を分かたず励む姿に、私も以前は技術屋だったのだと改めて思い、遠い昔が懐かしく想い出されました。20～40 代の頃はカメラの設計担当でしたが、設計だけでなく、各種のステップを経て、山梨コニカ（都留市）での量産立ち上げまで担当しました。

はやぶさでは地上で多数の実験をしていても宇宙空間に飛び出すと予期せぬアクシデントが生ずるのだと言うセリフがありました。カメラでも試作品の検討は充分にやっていましたが、検討台数に限度があり、量産前の検討でも 100 台程度でした。しかし、量産が開始されると直ぐに 1,000 台以上になり、ピッカリコニカやジャスピンコニカの様なベストセラーカメラの場合は生産台数が累計 100 万台以上になりました。このため、100 台程度では検出できない１％以下の予期せぬ不良が発生し、しかも不良項目がいくつもあると、例え 0.1％程度の発生率であっても量産に多大な影響を与えることになりました。

不良が多いと、そのようなカメラを量産しても無駄になるので製造ラインを止めることになります。即ち、ベルトコンベアを止める訳ですが、そうなるとベルトコンベアの横に並ん

だ多数の女性従業員はカメラを組み立てることができなくなります。製造現場でも管理者やベテラン社員であれば他にする仕事があるのですが、単純作業の女性従業員は一日中ぼんやりと座って過ごすことになってしまいます。出社してもやることがないのは辛いものです。こうなると現場の管理者から我々技術者に対して早くなんとかしてくれと苦情が出ます。

量産が開始する頃には発売日と販売台数が決まっており、発売日前日までの稼働日数により1日当たりの製造台数が計画されています。このため、ラインが停止すれば翌日からの製造台数を増やさなければならず、ラインが厳しくなります。従って、現場から苦情が出なくても技術者はできるだけ早く不良対策をしなければなりません。

私がリーダーを務めたときに、このようなことがありました。

あるとき予期せぬ不良が多発し、午前中にラインを止めなければなりませんでした。メンバーは直ぐに問題点の分析や解決に取り組みましたが、私はメンバーを集めて言いました。

「２時から対策会議を行う。」

「２時からだって？　そんなに短い時間じゃ解決方法は見つかりませんよ。」

「14 時ではない。次の本当の２時だ。」

「・・・」

その日のうちにどうにか解決方法が見つかり、夜中の２時から会議を開いてラインへの対策を決めることができました。出勤時間は 8 時 30 分でしたので、現場の管理者が出勤してから直ぐに対策方法を説明し、10 時頃にはラインが再稼働しました。その後、メンバーには寝泊まりしていた寮に戻って睡眠を取ってもらいました。

私がコニカ在職中に最も働いたと思うのは、この頃だったと思います。

このカメラは発売日前日までに予定の生産台数を達成でき、発売日の夜には製造現場の管理者やメンバーと大いに飲んで騒ぎました。

私がはやぶさを観て感情移入したのは、技術者は逃げられないということです。問題が生ずれば、誰のせいにすることもできず、自分が解決しなければ前に進みません。想定外などとは絶対言えないからです。

はやぶさの映画は３本あるようです。

ａ　昨年ロードショーの「はやぶさ（竹内結子主演）」

ｂ　ロードショー中の「はやぶさ　遙かなる生還（渡辺謙主演）」

ｃ　来月ロードショーの「おかえり　はやぶさ（藤原竜也主演）」

ＨＰを見ると、ａ，ｃはｂよりはやぶさのミッション以外のドラマが多いようです。